

妊娠率10%アップ 不妊治療に新手法

愛知県豊田市小坂町、竹内病院トヨタ不妊センターの越知正憲所長(右)のグループが、いったん凍結させた体外受精卵を解凍し、通常より長く培養して子宮に戻す新しい不妊治療法に成功した。

豊田の病院

受精卵を通常より長く培養 愛知・岐阜の妊婦4人が妊娠

会愛知地方部会で発表する。

新手法で妊娠が確認されたのは、愛知、岐阜両県の三十代の女性四人。体外受精した受精卵を子宮に戻す胚(はい)移植を五回以上行ったが、これまで妊娠しなかった人ばかり。ほかの十三人にも試み、妊娠率は三〇・八%だった。通常の場合に比べ、一〇%程度アップしたという。



越知正憲所長

受精卵は卵管で分割を繰り返す。戻し、胚盤胞(受精後五日目の卵)となり子宮の内膜に着床して妊娠する。体外受精ではこれまで、受精卵が卵管にある四分割か八分割(同一二三日目の卵)の状態で胚移植を行っており、受精卵をどのように子宮に着床させるかが、不妊治療の一つの課題だった。

の受精卵をさらに七十二時間培養し胚盤胞にしてから、子宮に戻す治療法を実施した。

併せて、子宮内膜の状態が良い時に胚移植できるように、女性ホルモンを使う。

たり、体外受精させた受精卵をいったん凍結させる凍結胚移植も組み合わせ、妊娠率を高めることに成功した。

越知所長は「受精卵を胚盤胞まで培養することで良好な卵を選別し、しかも状態のよい子宮に返せるようになった」と説明。受精卵が胚盤胞まで発達する割合はまだ約四割―五割で「培養技術の向上が今後の課題」としている。



発行所 ◆ 中日新聞社
名古屋市中区三の丸一丁目6番1号
〒460-8511 電話 052(201)8811